

綴葉

てい
よう

'21 11

No.402

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

ピエール・ビルンボーム著、大嶋厚訳『ヴィシーの教訓』

菅野賢治著『「命のヴィザ」言説の虚構 リトアニアのユダヤ難民に何があったのか?』

特集／装丁

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚／招待状

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/



京大生協
綴葉編集委員会

私の歴史を編み直すといふこと

ヴィシーの教訓

ピエール・ビルンボーム著

大嶋厚訳

吉田書店



一九四〇年、フランスはドイツに降伏する。その後、中部の町ヴィシーに臨時政権が樹立された。いわゆる「フランス国」である。今日に至るまでフランス政府はその責任の所在を明示せぬよう苦心してきたわけだが、他方でピエール・アスリーヌなどの文学者たちは、この時代に焦点を当て、数々の問題を江湖に問うてきた。そして知人アスリーヌからの刺激的な提案がとほ口となって、ここにもう一つ、あの時代を振り返る重要な著作が生まれることとなった。

私自身の半生の歴史家となること

著者ビルンボームはフランスで著名な歴史社会学者。ヴィシー政権樹立の直後、ユダヤ人の家庭に生まれた。しきにユダヤ人一斉検挙の危険が迫り、幼い彼は田舎の農家に預けられる。ここから「匿われた子供」としての彼の幼少体験が始まった。ただしこの体験を彼はこれまで明らかにしてこなかった。それ故、彼は逡巡する。歴史学・社会学の専門家として、どう自らの過去に向きあうべきか。そこで彼が選んだのは「私自身の半生の歴史家となること」だった。

この謂いは、本書の叙述と構成を通して明らかとなる。第一章「最初の情景」は、父と「私」(著者)を身籠る母の南への逃避行で始まる。歴史的資料を随所に引用しながら、背景となる反ユダヤ主

義を浮かび上がらせる手つきは鮮やかだ。その前巻で、「私」が生まれ、親切な農夫夫妻に預けられ、時にドイツ軍に家宅搜索されながらどうにか生き延び、戦後両親と再会するまでが描かれてゆく。

第二章「フランス国」が私を殺した」では、「私」のその後の半生が、再度多くの資料を渉猟しつつ明かされる。「私」が学生だった五〇年代後半とは、レジスタンスの英雄・ドゴール將軍が政権復帰し、「開かれた」フランス共和国が称揚された時代だった。ヴィシーの記憶がタプだった当時の風潮は、「私」の考えにも影響を与える。だが八〇年代、あのフランス国の官僚らが反ユダヤ主義政策を進めたことと知り、自らを殺そうとした存在を確信するに至る。

他方第三章「私は「正義の人」に救われた」では、「私」が親切な人々に匿われた経験を起点として、ユダヤ人を救った「正義の人」たちの足取りを書簡や通達などを参照しながら明らかにする。こうして本書は、歴史的資料から広がる背景の上に自らの半生を当てがい、改めて「私」を礎石とする歴史を編み直す試みを見せてくれる。

「沈黙する」といふこと

おそらく本書を貫くテーマは「沈黙」だ。身元が暴かれることを恐れた幼少の「私」、ヴィシーの記憶をタブーにした戦後の風潮、自らの半生を語らなかつた「私」、今でも過去の責任を取らないフランス政府、そして沈黙を放棄した「私」。ある箇所で著者は述べる。「沈黙は否認を意味するものではない」。本書から導き出し得る教訓は、自国の加害の歴史を認めず、或いは証言者の高齢化が深刻な問題である極東の、とある国にも有益なものだろう。(リンダ)

(二六一頁 税込三〇八〇円 5月刊)

史料が示すものとは

「命のヴィザ」

言説の虚構

リトアニアのユダヤ難民に

何があったのか？

菅野賢治著 共和国



杉原千畝、第二次世界大戦中にリトアニアの領事館に勤務していた彼は、ナチス・ドイツから逃れてきたユダヤ難民を逃がすため日本の通過ヴィザを外務省の反対を押し切って発行し、多くのユダヤ人を救ったとされる。「義人」「東洋のシンドラ」など彼とその功績は伝説化し、近年更に注目されている。しかし実際はどうなのか？ 本書では史料に照らして当時のリトアニアにおける政治状況とユダヤ人をめぐる事態の変化を明らかにしていく。著者の依拠している史料はアメリカのユダヤ系機関JDCに残されていた、当時リトアニアでユダヤ人難民の救助に対応していた人々の記録である。

第二次世界大戦が起こり、ドイツとソ連によってポーランドが分割されると、ポーランドからリトアニアへと難民が流れ込んで来た。この時点でリトアニアの中では親ソと反ソ、さらには反ユダヤ主義的な風潮が複雑に混ざり合って衝突を繰り返していたことが証言として挙げられている。大戦が始まって約半年後、リトアニアにはソ連軍が進駐して実質的にソ連の支配下に入った。その中でユダヤ人の国外脱出の動きが活発になり、それを助けたのが杉原のヴィザ発給だったのだが、それに関して著者は非常に興味深い読み解きを行っている。ナチス・ドイツが国内で反ユダヤ的政策を採っていたの

は事実であるが、それがリトアニアまで波及することは考えにくい。そしてソ連が進駐してきて国外脱出の動きが激しくなったのは、ソ連に対しての忌避感が強くなったからではないかというのである。ソ連においてもユダヤ人に対する敵対感情は強く、進駐・併合後にソ連の国籍取得が強制されたことでソ連に「魂を殺される」と感じたユダヤ人が安住の先を求めて移動しようとしたのではないかと著者は主張する。しかも、このユダヤ人の動きをソ連側も暗に望んでいたようにみえる史料すらも存在することが明かされる。ユダヤ人はドイツよりもむしろソ連からの避難を望んでいた。しかもそれをソ連側も望んでいたとなると、杉原のヴィザ発給に対する反対は実際のところは表面上のものであった可能性が生じる。そしてもう一点、日本側の外務省の対応も強硬な反対というものではなく形式に則った扱いを求めるものであったように史料から読み取れる、と著者は述べる。これらのことを鑑みるに、杉原の行為は結果としてユダヤ人の命を救うものであったが、それは必ずしも陰しい決断ではなかったかもしれない。

歴史はわかりやすい「英雄」を作り出してしまふ。本書で取り上げられた史料には当時リトアニアで実務にあたっていた担当者の名前が残っていたわけだが、彼らはこれまで無名の存在として埋もれてきた。たしかに、杉原千畝は当時の状況を考慮して早急な対策に努めたのだろう。ただし、そこにはそれこそ政治状況上の要因や様々な人々の助力も絡み合って成ったのであり、それらの複雑さを丹念に見ていく必要があることを本書は教えてくれる。

(ねこ)

(六四八頁 税込五七二〇円 7月刊)

風の便り

小山清著
夏葉社

この本はきっと、自分にとって大切な本になる——その本を読む前からそう感じることがたまにある。私の場合、『風の便り』がそうだった。銀閣寺近くの小さな本屋さんの棚に、この本はぼつんと置かれていた。派手なイラストが描かれているわけでもない。豪華な装飾が施されているわけでもない。でもなぜか、私はこの本にどうしようもなく惹きつけられていた。素朴で、だけど美しい本だった。本としての静かな佇まいを、この本はもっていた。

この随筆集の著者は、小山清。不遇の人生を歩んだ寡作の作家で、太宰治に師事したことでも知られる。彼の文章を読むと、その人柄がおのずと伝わってくる——「君が所帯を持ったことも、子供が生まれたことも、風の便りに聞きました。この世の中には、風の便りというものがある、こちらがべつに求めることをしないで、消息を聞かせてくれるものですね。なにげなく齎らされたものがいちばんいい。どこかの国の古い諺に、こんなのがなかったかしら。日頃会い過ぎるほど人に会い、席の暖まらぬ思いばかりしていると、そんなたまの便りが懐かしくて」。心にじんわりと沁みわたる、このごちんまりとした文章がなんとも味わい深い。

本書をそっと手に取り、じっと眺めてみる。するとそこに、小山清その人が浮かび上がってくるように感じられる。飾り気のないデザイン、手になじむ小ぶりのサイズ、一枚ずつ手で貼られた装画のあたたかみ、これらはどれも小山清の人柄や精神をそのままに映し出している。この本にはこの装丁しかあり得ないと言え思えてくる。気がつくこの本は、私にとって大切な本になっていた。（ばや）

（123頁 税込 1760円）

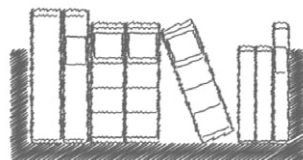


特集

装丁

本とは何だろうと、たまに考えます。印刷して綴じてさえあれば、それは本なのでしょう。たしかになかには、それで十分だと考える人もいるかもしれない。けれど私は、そこに何らかの不足を感じてしまいます。本は本であるからには美しくあってほしい、そう思ってしまう。そんなときいつも思い出すのが、恩地孝四郎の言葉です。彼はかつてこう言いました——「本は文明の旗だ。その旗は当然美しくあらねばならない」と。そして本を美しくするという使命を背負っているもの、それが装丁にほかなりません。今回の特集ではそんな、本を本たらしめるものである装丁に光を当ててみました。

（ばや）



オートフィクション

金原ひとみ著
集英社文庫

その赤さにどきっとして、思わず手に取ってしまったのがこの小説との出会いだった。振り向いている女の写真。目元はぼやけていて表情は分からない。ページをめくると、文字の羅列が表紙に負けない強烈な雰囲気を出している。



隣り合わせの愛と死と生と恐怖と恍惚と憤怒。テキーラ、マンコのヒステリー、フロアの喧騒。タケノコダンス、ニョキ、ニョキ、ニョニョ。ニョキニョキニョキッ。

22歳の作家、リンによる自伝的創作。本当の自伝ではなく、自伝のような作り話。彼女は常に混乱している。そもそも現実と妄想の境目が無いのだから、「オートフィクション」こそ彼女の世界そのものなのかもしれない。

22歳の冬から始まり、18歳、16歳、15歳と時代が遡っていく。ストーリーは断片的で脈絡がなく、ふと蘇った感情を思い出したままに吐露しているかのようだ。

彼女の激しい情動や、止まらない妄想は周囲との摩擦を起こす。恋人とスチュワーデスの浮気も、いつの間にか見えるようになった生首も、現実の話ではない……のか？

いや違う、彼女にとっては何もかもありのままなのだ。自分自身に死んでくれと願うことも、その後すぐ私は一生死なないと思うことも、全部が嘘のない彼女だ。誰しも、頭の中を本当にそのままだ漏れさせてみたら、こんな風に矛盾だらけでちぐはぐで生々しいんじゃないかと思う。

そんな僅かな共感を頼りに、リンの世界に必死に食らいつく。彼女が真っ向から放つパワーに息切れして、何度も休みながら繰り返し読む。本を手にとった時の強烈な印象が、もう何年も褪せないでいる。

(茫漠)

(280頁 税込524円)

夜空はいつでも最高密度の青色だ

最果タヒ著 リトル・モア

「本質は外身ではなく中身に宿るものである」と、一体誰が決めたのだろうか。

いつの日だったか、真夏の暑さから逃れるために逃げ込んだ古本屋。表紙の秩序ある水玉模様が気に入り、



自然と手が伸びた。正直、詩なんてよくわからない。詩が好きだと宣う人間たちは、教養にウザそうで、何となく人として信用できない。というか、ジャケ買いについて説教を垂れてくるに決まっている。だが、恐る恐る頁を捲てみると、宇宙がモチーフの詩がいくつかあり、素敵な未知との遭遇を予感した。

そうして本書を読み進めていった評者であったが、「四季にすらなれない感情に、何の意味もないよ」という一節に辿り着く頃には、もう既に宇宙猫のような顔になってしまった。

詩の時系列は曖昧で、人称代名詞は誰を指しているのかが不明確。グーグル翻訳を通したかのような違和感が所々ある。故になかなか、一つの解釈へと着地させてくれない。とても意地悪な本だ。けれど、頁を捲ているその時間、評者の意識は不思議な浮遊感を確かに覚え、心地よいと言わざるを得ない状態に陥っていたことに、悔しさを覚えたのだ。

ふと、表紙の水玉模様に目をやる。最初は秩序があるように思われたこの模様も、よく見ると細部はよくわからない。でも確かにゲジタルトが好きだし、それはまさにこの詩集を表しているようだ。愛しい「わかなさ」によって編み込まれているからこそ、何度でも読めるし、どこまでも引き込まれる。

こうしてめでたく、評者も詩を好む者たちへと仲間入りした。さあ、あなたも早くこちらにおいて。ジャケ買いでも全然いいよ。特に教養も要らない。信じてくれ。(ましゅ)

(95頁 税込1320円)

Go to Togo

一着の服を旅してつくる

中須俊治著 烽火書房

装丁という言葉のうち、「丁」は書籍の紙数を数える語を意味する。ここで紹介するのは、「丁」にこだわった世界でも類をみない一冊である。そのデザインが内容と織りなす読書体験は、天地が逆転するほどの面白さを持つ。



「シューカツをやめた」という宣言から始まる本書は、しかし一人の実業家の悪戦苦闘を綴っている。はじめは流れに身を任せ就活を行っていた大学生の「ぼく」は、次第に画一的な新卒採用方式に疑問を抱く。そこで彼は休学し、アフリカのトーゴへと赴く。その決断は、さらに第二の決断を「ぼく」にもたらす。帰国後に勤めた地域の信用金庫を退職し、再び彼はトーゴの地へ渡る。「アフリカと京都をテーマにものづくりをする。」道なき道を歩く「ぼく」、すなわち著者の中須の挑戦が、ここから語られていく。

アフリカと日本を往復しながら進行する著者の物語は節ごとに区切られている。日本での出来事は右開きの縦書きにより構成され、逆にトーゴでの体験は左開きの横書きとなっている。それゆえ読者は本の上下を替えながら、トーゴ、京都、更には東京やパリを駆け回る中須の動きを追うことになる。加えて、就職し、離職し、人に救われ人を想う若者の心の動きがその過程で伝達される。移動が制限された今だからこそ、この書物の多層的な動性は、万人の心に響くに違いない。

京都の染色職人とトーゴの織布に出会い、やがて著者は服作りに全力を注ぐこととなる。格差が生じやすいこの分野で「みんなが笑って過ごせる世界をつくる」ことを目指す彼の姿勢は、唯一無二のデザインとともに、ダイナミックな喜怒哀楽を伝えている。（とよ）
(223 頁 税込 1650 円)

明星

川島小鳥著
ナナロク社

10 月の晴れた日。汗ばむ陽気に反し、草木は色づき始め、夕方の北風は少々肌寒い。木漏れ日の下で花が咲き、蝶が舞う。爽やかで、愛おしく、しかしひとつまみの哀しさを感じる。川島小鳥の見つめる生きものたちの眼は、そんな情感を届けてくれる。



本書はポートレートの名手である川島が三年間に渡り台湾に通って完成させた、木村伊兵衛賞受賞の写真集。右上の角を切った、お菓子の家のような表紙を見てみると、ポップにデザインされたタイトル『明星』、鮮やかな黄色、そして素朴な美少女がパッと目に飛び込んでくる。ファンシーで「かわいい」、宝石箱のような装丁。しかし女の子の瞳と表情はどこか哀しみを感じさせる。裏表紙も見てみる。雨ですぶ濡れの醇美な青年男子がこちらをまっすぐと見つめる。やはり彼も哀しみを湛えているのだが、爽やかさは削がれない。

写真の撮られた現場の手触り感を感じさせるような、空色の布地の背表紙を持ち、写真集を開く。10 枚ほどの横長の 4 : 3 の写真と、同じく 10 枚ほどの縦長の 3 : 4 の写真が、交互に続く。プリンを食べてキュッと美味しそうな顔をする幼児、貝を被った不思議な蟹。「かわいい」。時折差し込まれる、どこか哀しげな眼をした生きものたち。訳もなく抱きしめたくなる。「かわいい」。川島の眼を通してフィルムに記録される生きとし生けるものは、「かわいい」という慈愛に満ちた愛情を喚起する。

このような特殊な製本は製本機械だけではできない。本書の全ての関係者たちが何度も試行を繰り返し、ここまで値段を抑えて出版に漕ぎ着けた。あらゆる「かわいい」を丁寧な詰め込んだ宝石箱のような一冊。（石透）
(240 頁 税込 3300 円)

鈴木成一 装丁を語る

鈴木成一著
イースト・プレス

本を手取る時、あなたは表紙を気にするだろうか？ 本の内容に惹かれて手を取ることが多いだろうが、実は本を読む時に最初に目に入ってくるのは装丁なのだ。今回の特集では気に入った装丁を各編集委員が紹介してきた。どれもなかなか魅力的だ。さて、服をデザインするデザイナーがいるように、本をデザインするデザイナーもいる。最近では人気漫画家やイラストレーターの絵が表紙を飾ることもあるが、そういった表紙絵も含めて装丁を作り出すことを仕事とする人がいるのだ。本書では日本のブックデザイン界で第一人者といえる著者が自らの仕事について語り明かしてくれる。

大学在学中にたまたま引き受けた脚本デザインからその道に進んだ著者は九〇年代にく講談社出版文化賞ブックデザイン賞を受賞している。彼の仕事ぶりがオールカラーの本書で直接触れられて興味深い。どのようなことを考えて一冊一冊のデザインを作っているか、示してくれる。どうすれば手にとってもらいやすくなるだろうか？（実は読書がそれほど好きではないらしいのだが）本の内容を読み、著者のイメージを考え、表紙のスタイルやタイトル・著者名の書体などを練っていく。小説・研究書・エッセイ……、彼の手がけた本は数知れない。きっとあなたも彼のデザインした本を目にしているだろう。

あなたの目と本の間にある透明な存在、そんなブックデザイナーという存在について本書を通じてもう少し知ってもらえたら嬉しい限りである。新刊で紹介されている『現代日本のブックデザイン史』と併せて読むとより面白いだろう。

(ねこ)

(237 頁 税込 2200 円)

失われたいくつかの物の目録

ユーディット・シャランスキー著
細井直子訳 河出書房新社

本書を手にとって眺めると、何やらきらきら反射する。まるで光る石のよう。短編ごとの表紙は黒のなかに亡霊のように浮かぶ地図や写真。本の断面は、その黒い表紙によって区切られ、白と黒のはっきりとした対比の世界がみえる。これは本でありつつ、本ではない。本という「もの」に息を吹きかけ、長く語られなかった記憶や知られなかった昔をあらわした、宝の部屋である。

本書では、地図から消えた小さな島についての資料や、今や観ることができない映画のあらすじなどを簡単な史実として書き記す。それらをテーマに、その後短編の物語が繰り広げられる。売れなくなり旦那や家族をもたないことを悔いる年老いた風邪っぴきの元女優。万物を知りたい欲求から月に恋焦がれ、月に地球のあらゆるものの保管庫をつくる職を全うしながらその限界と惨めさに気付く男。「すべてを忘れるのはもちろん悪いことだ。だがさらに悪いのは、何も忘れないことだ。」——自分を縛り付ける過去の栄光やトラウマを忘れる術はない。ただ、今見えているものを見ること、しなければならぬことをすることは、著者が本書を通してあなたに伝えたい忘却術なのかもしれない。

空調管理された、薄暗く高尚な博物館に足を踏み入れるときの緊張感と同じものを感じながら、あなたは背すじをしゃんとし、手にお菓子のくずがついていないか確認し、ページをめくる。一編を読み、枕元におく。さて、明日あなたはなにを忘れているのか。なにを覚えているのか。そんなことを考えるにちがいない。秋の夜長に不思議なグンダーカンマーへ。

(トントウ)

(260 頁 税込 3190 円)

鈴木成一
装丁を語る

新刊
コーナ

ぼくのがっかりした話

セルジオ・トーファノ著
橋本勝雄訳 英明企画編集

菜食主義者となつ

た人食い鬼、不眠症
の眠れる森の美女、

ほんとうにやさしい
 ことば
 ぼくのがっかりした話
Il ragazzo delle mie delusioni
Levante, piccola legge
 森田悠一・ユキオ・カネコ
 YUKIO KANEKO
 著者 森田悠一
 訳者 YUKIO KANEKO
 絵 山本 浩一
 おとなとこどもが心をよめぬ人はいない。
 読後にはアザラシ。おずさんの家で下
 下男に働く僕。お母さん、お父さん、お
 姉もねらぬ命の美しさ。イサナちゃん
 もアザラシと遊ぶ。ユキオとベータは
 未来をがっかりの物語！
 文庫版 1000円

カミ、姉たちの謀略でバツイチとなったシン
デレラ……登場するのは痛快なほどに「がっ
かり」な、馴染みのキャラクターのかずかず。

本作は、二〇世紀イタリア文学を代表する多彩な作家・トーフアノの代表作。小学校の卒業試験に三度も落第した「ぼく」は、奇妙な家庭教師と出会う。彼は授業もそっちのけにして、魅力的なおとぎ話を沢山話してくれる。ある晩「ぼく」は、彼が大切にしている、おとぎ話の世界へ行ける魔法の靴を盗み出し、一人で旅に出る。家庭教師の話を信じ込んでいた「ぼく」。だが旅先で出会うのは、最初に紹介した「がっかり」な運命を辿る有名なたちばかり。とうとう「ぼく」は叫び出す。「どこもがっかりすることばかり!」(……)「どこも貧乏だし、真実はねじまげられている

し、みじめな現実と、こけおどしや見せかけ、
つまらないことだらけじゃないか！」

すっかり幻滅した「ぼく」は、現実に戻って今度こそ猛勉強をする。そして迎えた四度目の卒業試験。その結果は……題名を裏切らぬ幕切れを迎える、とだけ申し添えておこう。本作が書かれたのは第一次大戦の最中。古

小説が跋扈し、体制はやがてファシズムへと向かう。そんな危うい時代背景を勘案すればここに描かれる「がっかり」が孕むシニカルさや危機意識も見てくるだろう。(リンダ)

(一六〇頁 税込一五四〇円 9月刊)

心はどこへ消えた？

東畑開人著
文藝春秋

全世界を震撼させた
コロナウイルス。

未知の脅威が引き起こしたものは何か。



数多の死者と社会的距離、充実した時間の喪失……。そういった「大きすぎる物語」が話題を席巻する中、一人一人の人間が実際に生きているはずの「小さな物語」は、少しずつ

陰を潜めていった。

最初に断つておくと、本書は決して疫病とそれにまつわる私たちの生活に焦点を当てたものではない。むしろ、世間とは無関係に進化する日常やあまりにも個人的な遠い過去への追憶を基に綴られている。なぜなら「小さな物語」とは、「大きな物語」の否定として立ち現れてくる、「私的」な物語だからだ。

流行に乗り遅れつつもあるアニメの劇場版を見て涙を流す著者。涙について考える中で泣くためにカウンセリングルームを訪ねてきたビジネスウーマンとのやりとりをふと思い出す。おそらく涙には三つの種類がある。一つは、生理的反応に過ぎないタマネギの涙。

二つ目は、多くの人に共感され理解されるような脚本の涙。そして、最後の一つは、他者には理解され難い自分だけの個人的な涙。それは、あまりにも〈私的〉で、だからこそ公にすることが憚られる、「小さな物語」の一つなのだ。

ネズミたちの前から消えたチーズのように私たちにとって当たり前に感じられていたはずの「心」は、幾度となく見失われてしまう。しかし、広くは語られにくい「小さな物語」の中にこそ、私たちが「心」と呼ぶ何かが隠れている。

(中二)

(二五六頁 税込一六五〇円 9月刊)

現代日本の

ブックデザイン史

1996-2020

長田年伸ほか編 誠文堂新光社

書店まで自転車走

走らせ、とくに三つて
もなくふらふらと棚
を見て回る。すると



突然、一冊の本が視界に飛び込んでくる。なぜその本に目を奪われたのかはわからない。けれどもなぜか、その本から目が離せない。思わずぱっとその本を手にとってしまう。

このとき私たちがその本に惹きつけているもの、それがブックデザインだ。「ブックデザインにできることがあるとするならば、それは書店空間においてまだテキストに触れる前の読者にその本の魅力を目にみえるかたちで提示し、一瞬でそれとわからせるための装いを本に与えること」。本書は、そうした使命を背負うブックデザイン、それもとりのわけカバーデザインに注目し、「ブックデザイン史から出版史を描くこと」を目指す。編者は長田年伸、川名潤、水戸部功の三人。巻末には、鈴木成二、菊地信義、佐藤亜沙美、名久井直子、祖父江慎との鼎談が収録されている。みな、現代日本を代表するブックデザイナーだ。

では、カバーデザインを並べることで何が見えてくるのか。それは「年を経るにつれてデザインがどんどんうるさくなってきた」ということだ。それはもう、本の内容にふさわしいかたちを与えるものではなくなっている。「現代日本のブックデザインにおいてはまずなによりも求められるのは「商品」として訴求力のある装丁であり、その意味でブックデザインはパッケージに成り下がっている」。

一九九六年から続く出版不況。この状況から脱する方法を考えるうえで、ブックデザインという視点は欠かせない。

(二五四頁 税込三三〇〇円 8月刊)

24フレームの映画学

—映像表現を解体する—

北村匡平著

晃洋書房



映画はいつでも繰り返し観ることができ。若い世代にとって、このような認識は当たり前であろう。スマホで映画を「ながら見」することも一般化し、映画観は一変した。

気鋭の映画学者・北村匡平はそのような現

代における映画観を真摯に見つめつつ、古典と現代の作品の様々な映像表現を接続し、批評していく。例えば第4章「映画の音響」では、二つの対照的な雰囲気表現をぶつけ新たな効果を生み出す「対位法」を軸に黒澤明の『酔いどれ天使』と『エヴァンゲリオン』新劇場版『破』を繋ぐ。音楽を対位法として用いる時、黒澤は、映画の物語の中の現実の音である「物語世界の音」として音楽を使用していたという。後者はそれができておらず、やや「あざとさ」を感じると著者は指摘する。

多様な視聴形態が一般化した現代における新たな映画論も充実している。例えば賛否の分かれる「リメイク」を、筆者は『打ち上げ花火、下から見るか？ 横から見ると？』を用いて論じる。本作は「ドラマ」が原作であり、「アニメ映画」としてリメイクされた際には、主題歌のMVや、主役の声優を広瀬すずが演じたことも話題となった。それら複合的なメディアは映画館やテレビ、CD、広告といった固有のメディアを超えて常に顧客の日常へ入り込む。『映像を観る』こと自体がすでに『リメイクを観ている』とまで著者は述べ、現代における映画体験が捉え直される。従来の「現代の映画観を抑えた本書は、現代映画学の教科書と呼べるはずだ。」(石透)

(二八六頁 税込二七五〇円 5月刊)

現代思想2021年9月号

特集II〈恋愛〉の現在

— 変わりゆく親密さのかたち

永田夏来ほか著 青土社

時代が変われば恋愛の在り方も変わる。いわゆる「恋愛結婚」が多数派となった



たのが一九六〇年代後半のこと。八〇年代には消費と恋愛が強く結びつき、デート文化が編成されていった。恋愛至上主義は高度消費社会と共に一時拡大するが、次第に人々はロマンティック・ラブよりも「自分らしさ」「居心地の良さ」を求めるようになっていく。そして今。ある一定の価値観が社会を席巻する時代は終わった。一人一人が、自分にとっての「恋愛」(そもそも恋愛という言葉を用いない人もいるかもしれない)について考える必要がある。

ある人は「クワロマンティック宣言」を掲げた。「恋愛」には興味が無い。しかし、自分にとっての「重要な他者」を大切にすることを「人生を賭けたプロジェクト」としてやっていくと決意したのである。またある人は、他人の恋バナに自分の恋愛以外の経験を重ねる。片想いの苦しみと、サッカーチーム内の名コ

ンビへの嫉妬心。失恋と、引越越しに感じた喪失感。ドキドキも多幸感も感傷も「恋愛の専売特許ではないかもしれない」と考える。私たちは、この世に既にある言葉を使っただけで、自分の気持ちを語ることはできない。しかし他者との関係性も、自分の奥底にある感情も、分類できない自分だけのものなのだ。まだ言葉にならない想いをその形のまま壊さず抱き続けるために、いつか自分と向き合う旅に出ることがあるかもしれない。そんな時、人々が愛に悩んだ軌跡を残すこの本は、あなたの手助けとなるだろう。(芒漢)

(二六二頁 税込一七六〇円 8月刊)

死、欲望、人形

評伝ハンス・ベルメール

ピーター・ウエフロバート・シヨート著

相馬俊樹訳 国書刊行会



魅惑的なタイトルだ。そしてベルメールの一生はこの三つの言葉に集約される

のかもしれない。死・欲望・人形。

本書は稀代のアーティスト、ハンス・ベルメールの生涯を描いた評伝である。時代順に分けられ、その時に作られた作品が写真付き

で掲載されている。どの作品も挑発的で、思わず目を隠したくなる(そして指の間から覗きたくなる)。直視することに耐えられず、しかし目を背けることが出来ないほどの蠱惑的な作品たちほどのようにして制作されてきたのか。作品からは何うこのできない人間像を本書は教えてくれる。

初めは父親への反抗だった。家父長制を嫌う技術者として期待された役割に逆らうために、彼は作品を作った。時代は全体主義に突入し、健康や有用性が叫ばれる中で「例え間接的であっても何らかの形で国家に奉仕するような一切の仕事を放棄する」と表明した。彼が制作する作品の、悍ましさ、不気味さ、淫靡さは全て排除される対象だった。

フランスに移住した彼はシュルレアリスムの社会に入り、バタイユとの運命的な出会いを果たす。「マダム・エドワルダ」や「眼球譚」の挿絵を描く中で、有用性から離れた至高のエロティシズムを作品として描いていく。芸術が人を癒すのではなく、傷つけるものであるとしたら、ベルメールの作品は私たちに否応なく傷つける。社会から排除され、自意識から抑圧される人間の欲望を呼び覚ますからだ。しかしだからこそ必要なのではないか、人の欲望は消えないのだから。(きもの)

(四二七頁 税込四九五〇円 8月刊)

東京の生活史

岸政彦編
筑摩書房

少し私の話をさせてください。来年から東京に住みます。でも東京は嫌いです。

人は多いし、空は狭いし、セカセカしてるし。正直、京都が出るの、イヤです。でもそんな東京でも「生活」をしている人がいるんだよねあ、と思い、本書を手に取りました。

本書はタイトルのとおり「東京の生活史」をまとめたものです。本書の最大のポイントはその分厚さです。物理的に圧倒されます。そしてページを捲ると、どのページにも人間の「生活」があります。オチはありません。読みどころもありません。そういうのは期待しない方がいいです。「じゃあ聞くけど、あなたの人生の〈読みどころ〉は？」——と、本の中の人物に聞かれたら、答えられます？オチもなく読みどころもない——それが逆に言えば、本書の〈読みどころ〉なのかもしれません。『ギーズキングがドビュッシーの「月の光」弾いて、なんってきれいな世界だ、って。それからもう、あんまり感度がよく

ないラジオ、毎日聴いて」というタイトルの章があります。はっきり言って、どうでもいいです。でもそんな「どうでもよさ」が「生活」のリアルなんだ、とハッとさせられます。〈語り手〉にとってはメロディーでも、〈聞き手〉にとってはノイズにすぎない。そんな飾らない温度差が、「人生」ってやつだ。

一二〇頁にもある本書は、物理的にも心理的にもあなたに「重さ」を与えます。一二二頁ぶんの生活。四六二〇円ぶんの人生。文字通り、誰かの「人生の二ページ」を、ちょっと覗いてみた今日の頃です。(出席点) (一二二頁 税込四六二〇円 9月刊)

ヨーロッパ中世の社会史

増田四郎著
講談社学術文庫

歴史から現代社会を見つめ直す。重要な問いながら、この問いを前に我々はし

ばしは逡巡してしまふ。この問題への様々なアクセス方法を提示してくれるのが本書だ。

市民セミナーの講義録というだけあって、文体は柔らかく、四から一四世紀ヨーロッパ

の社会構造を考察するという壮大な内容にも頷くことなく読み進められる。

まず、四世紀のゲルマン民族大移動に対してもたれる、ゲルマン側の一方的侵略という印象が否定され、以後もローマとゲルマン双方の制度が共存したことが明らかに。一二世紀頃には、どちらの文化や制度が優勢になるかで農業生産力に地域差が生じ、生産力の高い地域では作物の多様化がみられ、低い地域では遠隔地との交易が活発化する。これに伴い、各地の特産物を交換する場として市場都市が成立していくのだが、著者はここにグローバリゼーションの母型をみる。各地域が独自の色を帯びつつ、相互依存がヨーロッパ全体に拡がる準備がここで整えられた。

しかし著者は強調する。そこには地域それぞれの「誇り」と「カラー」があったことを。そしてヨーロッパでは今もそれが残っている。と。「消費者の意識が、単なる合理主義に走るのではなく、そこにけじめをつけて、歴史に根をおろしている」。現代日本が陥っている有名無実なグローバリゼーションとの違いはここにある。画一化されていく風景、食べ物、言葉。遠い中世ヨーロッパの歴史から見つめ直すべきことは、案外身近なところにあるのかもしれない。(投稿：ハラン)

(一二三頁 税込二一七円 7月刊)

福祉国家

救貧法の時代からポスト工業社会へ

デイヴィッド・ガーランド著

小田透訳 白水社

福祉国家を学ぼう

と思えば、まずイエ

スタ・エスピノーア

ンデルセンの『福祉

資本主義の三つの世界』（ミネルヴァ書房）

が思いつくだらう。しかし、これからはまず

本書が福祉国家の入門書として読み継がれる

ことになるう。

入門書といえども、専門書に劣らない内容

の濃さだ。福祉国家の定義からその歴史、現

代に至るまでの変化が述べられる。福祉国家

を類型化したアンデルセンに対し、著者は各

国の福祉供給の度合いをグラデーションに並

べる。また、それらの差を単なる文化や価値

観の違いと述べるのではなく、歴史的背景や

経済事情などを考慮に入れ、その必然性を考

察する。福祉国家を国家のあるべき姿として

語るのではなく、どういった制度が福祉国家

を形作り、どのような問題に対処している

（きた）のかを著者は明らかにする。

実のところ、福祉国家は資本主義を是正す

るが、現状を追随する制度でもある。格差が



拡がる現代社会では、福祉国家は困窮した人を助けるための装置になるはずだが、現代では中間層が最もその利益を享受している。つまり、福祉国家は問題だらけの資本主義に歩み寄りながら制御はするが、大きく変えることはできない。そうした欠点を批判するのは容易だが、もはや我々は福祉国家をなくすことも代替案を即座に講じることでもない。

「福祉国家に「賛成」するとは、一九四〇年代であれ、今日であれ、天使の側につくことではない。」福祉国家は、現時点において必要不可欠な社会の選択なのだ。（トントウ）

（二三四頁 税込二六四〇円 8月刊）

功利主義

J・S・ミル著

関口正司訳

岩波文庫

あるいは、名前だ

けなら誰でも知って

いるようなミルの主

著が、ついに文庫化

された。言わずと知れた古典的名著『功利主義』である。本書で彼は、正しい行いと不正

な行いの判断基準を「効用」、すなわち「最

大幸福原理」に求める。曰く、幸福を促進す



ればするほど、その行いが正しいとされる一方、その反対のものをもたらせばもたらすほど不正とされる。ここで幸福として念頭に置かれるのは、快楽のことである。議論はやがて、苦痛を免れ快楽が豊富であることという「道徳」の基準、更には道徳的行為の動機づけや、「正義」と効用の関係にまで及んでいく。

功利主義の立場を積極的に示す場面もさることながら、向けられた批判に対抗する、ミルの懸命なディフェンスも面白い。主に前半で提示されるその応答において彼は、向けられた批判が功利主義だけでなく、他の立場にも妥当することを訴える。このような再反論が妥当であるかは措くとしても、誤解を取り除きつつ、自らの立場の正しさを証明する構成は、読んでいて非常に興味深い。

一読してすべてを理解できるほど容易でないとはいえず、本文は難解な述語のオンパレードというわけでもない。言葉遣いが比較的平易であるのみならず、本書では「utility」を定訳の「功利」ではなく「効用」と訳すなど、読みやすさへの配慮も見とれる。なお、本書は巻末附録として、同じくミルの『論理学体系』における関連部分を収録する。ミルの哲学をより深めてみたい方にも、まずは手に取っていただきたい一冊である。（八雲）

（二五四頁 税込八五八円 5月刊）

世界と日本の地理の謎を解く

水野一晴著 P H P新書

読者の大部分は地理に関しては高校の授業や学部的一般教養科目以来であろうが、地理の面白い本があれば読んでみたいという方はいらっしゃるのではないだろうか。そのような方に本書を薦めた。

著者は調査・研究で日本全国津々浦々と海外五〇ヶ国以上を訪れた経験を持つ。本書は著者が現地へ出くわした地理の不思議を、現地調査や文献調査によって謎解きをし、記述したものである。「そうだったのか!」という感激が伝わる知的興奮溢れる一冊である。

本書では国内外を問わず様々な土地の地理について扱っている。例えば、ナミビアに広がるナミブ砂漠は世界一美しい砂漠として知られる。海岸付近の砂は白いが、内陸部になると赤味を帯びる。なぜ砂が赤くなるのか。また、この砂漠はいかにしてできたのか。鳥取砂丘との共通点は何か。このような地理の素朴な疑問に著者は丁寧に答えている。

最後に、私は地理が好きだ。私と同じ地理好きが本書から地理へより深い興味を持っていただければ幸いである。(投稿・マンガン)

(二五一頁 税込二〇四五円 5月刊)

「自分らしさ」と日本語

中村桃子著
ちくまプリマー新書

衣服や趣味など、己を己たらしめるものは多い。言葉もまた然りである。話し書く中で立ち現れる「私」たちは、しかし同時に、不気味な「らしさ」とせめぎ合うこともある。

本書は、社会と言葉の関係を扱う社会言語学の入門書となる。名前や人称、語尾といった言葉の細部を、著者の中村は複雑な自己同一性の表現として読み解く。その際、特にジェンダー・アイデンティティの表れと解釈に重点が置かれる。一人称「ぼく」を巡る記述はその一例である。明治の政策による男性一人称としての「ぼく」の制定から、女子による「ぼく」使用の背景、現代における「ぼく」使用の多義性まで、その構築と変化の経緯が、文脈と意図を踏まえた上で述べられていく。

他方で自己表現の言葉が、常に社会集団の固定観念とせめぎ合うことも指摘される。実際に用いられない「わ、わよ」といった「女ことば」は、「女性はこの話すべき」という無根拠な規範を構築し、女性の語り方を巡る言説を産出させてきた。本書はそうしたアイデアオロギーとの戦いの記録でもある。(とよ)

(二四〇頁 税込九四六円 5月刊)

はじめのプラトン 批判と変革の哲学

中畑正志著 講談社現代新書

表題のとおり本書はこの、古代ギリシアの偉大な哲学者への入門書である。西洋哲学の歴史はその「注釈」にすぎない、とも喩えられるところのプラトンだが、論じられるテーマの多様さから言って、その哲学をいかに上手くまとめるかは、論者の腕にかかっている。

著者はここで、彼の哲学を「批判と変革の哲学」という観点から切り取る。本文中、いわゆる教科書的なプラトン紹介は少ないが、彼が「対話」という形式で著作を執筆し、そこにわざわざ「ソクラテス」を登場させた意味が丁寧に読み解かれる。その中で、対話相手の考えを批判的に吟味し、必要に応じてこの相手の思考に変容を促す、その哲学スタイルの魅力が存分に引き出されてゆく。

加えて、単なるプラトン読解に尽きないのも、本書の大きな特徴である。最終章では、彼の哲学が「プラトン主義」のみならず、ナチスやネオコン思想に与えた影響が示唆される。読者はここで、一步引いた外在的視点からプラトン哲学の全容を眺め、より立体的にその在り方を捉えることができる。(八雲)

(二五六頁 税込九九〇円 5月刊)

あなたが教えてくれた本

——いなくなつて初めてもっと言葉をメモしておけばよかったなと思う。写真を撮つておいたり声を録つておいたり。また会えると思つていたから、そんなことをしていなかった。最後が分かつていたら、できることはあったのに。でも別れとはそんなものか……。だから改めてここであなたが教えてくれた本をメモしておきたい。あなたのおかげで、いろいろな本に出会えました。

狂気に惹かれて

「埴谷雄高という人物は面白いよ」とあの人は言っていた。しかし代表作『死霊』を読んで中々分からない。そんな時、鶴見俊輔が『埴谷雄高』という本を書いていてことを知った。鶴見は晩年、埴谷雄高論を書く中で、戦後転向した埴谷が何故『死霊』のような思弁的な作品を作ったのかを探索していた。

鶴見を通して埴谷を見ると、その魅力が分かってくる。埴谷は無限や虚無を描く中で人間の卑小さを強調していた。時に幽霊に肩入れし、時に虫の目を借りて人間を見つめる埴谷。鶴見はおそらく、自身の中にある狂気を埴谷の中に見出したのだろう。まっとうにも誠実にもならず、ただただ狂気に留まる埴谷は、たしかに戦後作家の中で不思議な魅力を放っていた。

社会の強さ

「杉浦日向子の本は全部買つてもいい」とあの人は言っていた。

江戸時代の暮らしと生活を描いた漫画家、杉浦。代表作『百日紅』を読むだけでも、全著を集めたくなるほどの魅力が分かる。

浮世絵画家・葛飾北斎と娘のお栄、弟子の



英泉らを主人公に江戸の風俗と文化が描かれる短編集。浮世絵のようなタッチも相まって、まるで落語を聞いているように物語が進んでいく。

気付くのは人と人との距離感だ。血縁もないけれど家族になり、知り合いでもないのに飯を強請る。火事があれば祭りのように町民が集まり宴会を起し、死や官能が日常の中にそっと顔を出す。

適度な距離をとりながら人付き合いをし、面倒ごとに巻き込まれながら、それを楽しくやりすごしていく。社会の強さとは結局、そんな人と人との付き合いなのだろうか。

弱さについて

「書評するならこの本がお薦めかな」とあの人は言っていた。岡田美智男著『弱いロボット』。ロボットと聞くとすぐに「使えること」をイメージをしまふ。役に立って、勝手に作業をしてくれる機械。しかし著者はそうしたロボットに魅力を感じない。

本書で登場するロボットはどこか足りない。話しかけられても「む」と悩んでばかりのロボット。ゴミの前に行けるけど拾えないゴミ箱ロボット。しかしそんな足りないロボットたちを前に、人々は立ち止まる。子供たちは友達になろうとし、高齢者がロボットを話題に繋がっていく。弱さは、人と人を繋げる力になるのだ。

「弱い」ことにも役割がある。「強く」なることで見失うこともある。見過ごされがちな価値に光を当ててくれることを、あの人はよく「面白い」と言っていた……。

——人と出会えたから本と出会えた。実は先生の講義やゼミよりも、何気ない雑談の中に、私の学びがありました。（きもの）

ちいさい秋みいつけた

あなたはいつもどこで本を買ってる？ ルネ？——京大生の鑑だね。丸善？——ウンウン、丸善いいよね。私も好き。Amazon？

——便利。本屋って、ただの「本を買う・売る場所」じゃなくて、その空間が醸し出す雰囲気とか、演出される時間とか、そういった時間・空間を含んだ体験一般を指すんじゃないかな、と最近思うんです。それに、「本」っていうのも、ただの「読まれるもの」じゃなくて、時間・空間を含んだ「体験」を指すんじゃないかな。そこで、今回はそんな本にまつわる「体験」の書評をしようと思います。これまでの誌面でむづかしい話はたくさん読んできたと思うから、ここではゆるっとした話をするね。ほないこか。

まさかの休館・ミシマ社の本屋さん

研究室を抜け出して、ふらっと自転車ですり抜け。京都御所にほど近い「ミシマ社の本屋さん」に行ってみました。でも休館でした。とほほ。圧倒的な定休日の多さで有名な店とか、有名な店とか、毎いので丸善に行ったらミシマ社の本を買いました。結局丸善かよ。そこで買ったのが『THE BOOKS 365人の本屋さん』がどうしても届けたい「この一冊」と『今日の人生』。どちらも味があってステキです。特に『今日の人生』は益田ミリさんの可愛らしいイラストと、オチのない「今日の人生」を描いたストーリーが胸を暖めてくれます。「——という今日の人生」という作中で使われるお決まりのフレーズを使うことで、研究室に沈む夕日を、ちょっとロマンチックに感じることができそうです。これらの本の良いところは、変に緊張りすぎていないところです。言い換えると、「売れよう」としている感じがしない、ともいえましょいか。そんな

な等身大な本に励まされた、午後二時半の私でした。えへへ。

どんな名前しとんねん！ ホホホ座

丸善からその足で三条大橋のほど近くにある「ホホホ座」に向かいました。名前はオペラ座みたいだけど、実は本屋さんです。浄土寺にもお店があるんですけど、今度行ってみよっと。この「ホホホ座」の誕生秘話が知りたくて『ホホホ座の反省文』という本を買いました。本書の一番面白いところは、「自分たちのことを棚に上げない」という著者の姿勢です。いわゆる「意識高い系」の本とは違った、これまで等身大の成功談・失敗談が語られています。なるほど、だから「ホホホ座」なんだ……という名前の秘密も語られているとかいいとか。本書を読むと、実際にお店に足を運びたくなること請け負います。あ、三条店ではカレーが食べられるよ。

旅路の末にたどり着いた天狼院書店

三条から鴨川を南下して、四条へ。南座からちょっと南に下った所に、天狼院書店というお店があります。ここでは「秘本」という本を買っちゃいました。これは「オリジナルのカバーで覆い隠してなんの本か秘密にした本」なんです。かれこれ一〇個以上も発売されています。その中でも中身が公開されて「公然の秘密」となった第●代秘本・『白菊』を買いました。長岡花火の花火師を描いたノンフィクション。さらに天狼院書店発行の『READING LIFE』という雑誌もゲット。天狼院の情報が盛り沢山です。読み終えたら店員さんと話したくなる——そんな本であり、そんな本屋さんでした。いかがでしたか？ ちょっとした秋のお裾分けでした。ああ、また行きたいなあ。

(出席席)

編集後記

僕は普段、ハンナ・アーレントという思想家の研究をしています。けれども最近、なかなか研究に身が入りません。「自分はなんでこんな研究をしているんだろう」と、どうしても思ってしまうのです。ありきたりな問いですが、やはり切実な問いでもあります。

では、なぜ僕はアーレントを研究することにしたのか。それはたぶん、忘れがたい文章を、アーレントが遺したテキストに見出したからです。たとえばこんな文章です——「何もしていないときほど多くのことをしているときはなく、一人でいるときほど孤独でないときはない」。だとすると僕は、仰々しい言い方ですが、救いをもたらしてくれるような一文と出会うためだけに、今でもたくさんの本を読んでいるのかもしれない。存在するかも定かではない一節を、ずっと探し求めているのかもしれない。そんなことを思います。

そういえば堀辰雄は、こんな言葉を遺していました——「あらゆる作品の中で我々がよき涙を流すのは悲しい数頁のためではなく、適当な場所に置かれた一行の奇蹟のためである」。僕はこの「一行の奇蹟」を探し求めているような気がしてなりません。（ばや）

当てよう！ 図書カード

今年は一〇月に入っても暑い日があったりしましたが、この頃は秋本番という感じがしてきました。この季節、時々暖くなる気候を「小春日和」と呼びますが、さてこの小春日和をアメリカではなんと言うでしょう。

1. Indian summer
 2. Canadian summer
 3. St.Martin's summer
 4. False summer
- （ねこ）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは11月15日です。



《7月号の解答》 7月号の問題の正解は、2. 早雲でした！ 日本らしい儼かな雰囲気、圧倒的なリリシズムを魅せてくれるラッパーです。『懊悩』という楽曲がオススメです！

図書カードの当選者は、ルコウソウさん、Sosoさん、書さん、ばすかるさん、ナクカメさんの5名です。当選おめでとうございます。（ましゅ）

読者からひびく

○特集「受賞作」大変楽しませていただきました。ご紹介いただいた本も普段読まないジャンルが多く夏休みに読んでみようと思いにまりましたが、知らない賞が更にたくさんあるなあと賞名を見てとても楽しくなりました。これから本を選ぶ時の参考にさせていただきます。皆様暑さに負けず頑張ってください。

（防災研・ルコウソウ）

——有難うございます！ 賞の種類を知れば知るほど、読むジャンルも増えていくと思うので、有意義な企画ができてよかったです！ ○私もあと半年で卒業するので、今のうちに一割引きで本を買っておこうと思います。

（農学・ちっその田）

——お時間のある学生の間に是非！

○四〇〇号の刊行おめでとうございます。特集楽しく読ませていただきました。五〇号、一〇〇号など、節目の刊行ではどんな表紙でどんな特集をしていたのか考えるだけでもワクワクします。長梅雨に酷暑にコロナで読書時間が増えています。引き続き多彩な書評を心待ちにしています。（防災研・水引）

——有難うございます！ これからも色々な企画に挑戦していきます！（ましゅ）